

二条院讃岐の実人生(二)

——後半生を中心に——

伊佐迪子

〔抄録〕

本稿では讃岐の三十九歳から四十一歳までの実人生を検証した。治承四年(一一八〇)に父頼政と兄仲綱とを失い、治承五年(一一八一)には皇嘉門院の崩御により、讃岐の身辺は急に寂しくなった。

兼実息の良通と良經は二人とも詩と連句に対して非凡な才能を持っている。世は詩と連句に興味を感じる時代になっており、兼実家では文士たちを招き詩と連句会を催している。連句会には兼実自身の参入と讃岐の同席も明らかになったので、良通と良經と

讃岐の係わりが明らかになった。従って讃岐の和歌には詩や連句の知識が豊かに取り入れられていると云えよう。

体調不良の兼実は讃岐が傍らに居なければ、生きて行くことは出来なかつたであろう。世間に対して自分の代理をさせ、兼実家にとって最主要的な人物として、讃岐を遇している兼実である。本稿の検証結果は讃岐研究にとって大きな前進である。

キーワード 代理 良通 良經 歌集 連句会

はじめに

先稿では兼実家に入った讃岐の最初の六年間を検証した。讃岐の六年間の人生は流産の悲しみで始まり、体調不良の兼実の介護に明け暮れる日々が続いた。兼実家は和歌界の保護的な立場にあり、兼実家に参集する俊恵や重家、更には俊成との接触も讃岐にとって可能であ

ったことを窺い知ることが出来た。(この間の事情は拙稿をご参照いただきたい)^①

本稿では七年目から九年目までを考察する予定である。以仁王の乱は父頼政と兄仲綱の自害を誘い、讃岐は心ならずも父と兄とを同時に失うことになる。また、成長した兼実息の良通と良經との接触は、讃岐の詠歌に対する成長を齎したと考えられる。

平家の都落ち、義仲の入京などに繋がる戦乱前夜の都の中で、讃岐は兼実の傍でどのようにして生きて行つたのであろうか。(本稿において二条院讃岐を讃岐とのみ表記する)

(7) 治承四年(一一八〇) 讃岐三十九歳 兼実三十二歳

良通十四歳 姫君八歳 良經十二歳

一月八日 女房参詣吉田、崇神院等、(姫御前相具之) 最密儀 毎年事也、但崇神院今年始参也、(基輔乗車)

一月十一日 女房、姫君御前(八歳) 共参女院御所、

一月廿八日 今暁、女房及姫君侍従等、密々令参春日社、女房

姫君今夜参御社、侍従明暁可参詣也、(基輔、

保能、信光、良清等、騎馬在共)

一月廿九日 入夜女房自春日帰洛、女房等参之由深以秘之、

巳刻、侍従出奈良、宇治不逗留、直過了云々、

讃岐が兼実家に入つて七年目である。一月八日に讃岐は姫君のお供で神社参詣に出かけている。また、十一日には八歳の姫君とともに、讃岐が女院へ新年の挨拶に出向いている。記述の内容と基輔のお供であることから女房は「讃岐」である。

一月廿八日は母親が姫君と良經とを連れて春日参詣に出かけている。次男の侍従良經は嫡妻の母親が伴つて行くこともあり、讃岐が付き添うこともある。しかし、供人の顔ぶれが嫡妻との関係を示しており、同じ女房表記ながら讃岐の付添いとは異なるので参考に挙げておく。

二月八日 去夜聊有夢想、今夜致祈念、日来有所勞、今日殊倍増、

二月廿四日 参女院御堂、今夜修二月也、女房為聴聞参御堂、二月廿六日 女院御懺法結願也、余依風病不出仕、

三月九日 女房姫君等、密々参稻荷、祇園社等、(只侍許在共 能忍也)

兼実の体調は思わしくなく夢想とお祈りに頼り幸せを祈っている。二月廿四日には女院御方で行われた修二月に讃岐が聴聞に参入している。廿六日の御懺法結願には兼実は体調不良で出仕していない。讃岐は兼実を残して結願に参入することは出来なかつたであろう。三月九日には讃岐は姫君と共に稻荷、祇園等へ参詣に出かけている。

三月十七日 自今日三箇日、奉幣帛大原野社、依有夢想事

也、

三月廿一日 信助阿闍梨来、談最吉夢、

三月廿三日 今暁女房有吉夢、俄俄熊野可立使之由、致沙汰

也、

三月廿六日 智詮阿闍梨、来月朔日可進発熊野也、是余使也、

又招覚乗得業、示付春日祈事等、自来月三日、

可参詣春日、又同日、可奉供養自筆心経事等也、各能々可密々之由仰了、只生涯安穩、而不可招災、

三月晦日 今夜余有吉夢、今日余并奉書金泥心経了、又女

房奉_レ書_レ墨字同經三卷、相具送_レ智詮之許_一了、
〔兼実心中詠〕世をおもふころの中をみくまのの

神のめくみをあふくばかりそ

兼実は夢想や吉夢に頼り自筆の経文や写經を大原野社、熊野大社、春日大社などに奉納し供養している。これは体調不良を癒し生涯を安泰に生き抜くための神頼みである。兼実のこれらの願いにも讃岐の見る吉夢と手助けが必要になる。

兼実は讃岐の見た廿三日の吉夢に依り熊野大社へ智詮阿闍梨を、兼乗得業には春日大社へと、自分の代理参詣をするように手配している。晦日には兼実の吉夢に合わせて讃岐が心経三巻を墨字で書いており、兼実自身も金泥の心経や理趣經を書き継いでいる。

五月十日 入道相国入洛、武士満_レ洛中、今晚有_レ夢想事、

五月十五日 今夜、三条高倉宮（院第二子）配流云々、自_レ今旦、

余咳病殊増、温氣出来、

五月十六日 三条宮配流事、源以光、宜_レ処_レ遠流、早令_レ追_レ出畿

外、

五月廿日 夜半頼政入道引_レ率子息等、参_レ籠三井寺、己天下大

事歎、奈良大衆蜂起、己欲_レ上洛云々、余尋_レ問

此事、相扶病_レ参_レ院、運_レ家中雜物、令_レ逃_レ女人等、大略可_レ逃降_レ之支度歎、

四月中旬から五月にかけて兼実は体調不良であった。以仁王の反逆に呼応して、南都比叡山の大衆が蜂起し京は騒々しくなった。福原

から入道相国が武士団を率いて入洛したので、朝廷は謀反人の三条高倉宮を遠国配流とし、即刻畿外への追放を決定した。

五月廿日の夜半に頼政は居所に火を放ち一族を引き連れて、三井寺に参籠したので天下は大事になった。兼実が奈良の大衆蜂起の真相を尋ねる為に参院すると院では大騒動になっており、逃降する支度の最中のようにであった。

五月廿六日 少時平等院執行良俊、奉_レ使者_一申云、殿上廊内自殺之者、三人相残、

其中具有_レ無_レ首之者一人、疑者宮歎云々、

六月十日 所_レ逃_レ向_レ南都之輩、其中有_レ相少納言宗綱云々、

六月十五日 相少納言宗綱、被_レ拷問之間、申_レ種々事等云々、

頼政と仲綱と源氏一族は宇治橋での合戦で敗退し、官軍が宇治橋を攻め落とした。頼政は仲綱と他の一人の三名で平等院にて休息中に官軍に踏み込まれ、ついに自害したことが判る。五月廿六日付けの平等院執行良俊の使者は、三人のうち一人は首が無いと云う。平等院の塔中には寛永年間に建てられたものではあるが、頼政の慰霊塔と辞世の句碑がある。

国賊となった頼政とその一族は政治的に葬り去られ、通常の服喪が認められることはない。女性には罪を問われることはなく、讃岐や母親が七七日の供養をし、父親と仲綱とその子清綱、そして源氏一族の冥福を祈ったと考えられる。凡そ七月十三日頃が頼政の満中陰なので、讃岐もこの間は兼実の傍から離れたであろうと考えられる。

以仁王に呼応した興福寺と三井寺の罪科を問う宮廷側。南都へ逃れる以仁王支持の公卿達を搦め取り拷問に掛ける官軍。相少納言宗綱卿は『平家物語』には、以仁王に謀反を勧めた張本人だと見えており、後年、兼実にもいい加減なことを囁いて来た人物である。

六月廿三日 密々有嫁娶事、右大将良通、通花山院中納言兼雅

卿娘、非執、非御之儀、最略密々沙

汰也、元儀関白為子、可被迎大将云々、其

儀相違歟、無衾覆之禮、事訖余女房帰宅、

七月十二日 申刻、行頼頓死、此五六日有熱腫、廿五年積奉公、

七月十九日 此日、姫君着袴也、・・先是女房八人、祇候南面

簾中、姫君同座帳前、母上同相副、・・次余入

簾中、(大将同之) 母上相共令著装束、余結

腰、・・姫君坐定之後、余召人、・・陪膳刑部

卿頼輔朝臣、取打敷参上、女房取之傳陪膳女

房、(京極局、姫君乳母也)・・事了入内寝、姫

君脱装束、

清盛の結構に依り兼実の長男・良通が入道相国の孫娘を娶ることに
なった。兼実家にとっては話と違って、病弱な孫娘を押し付けられた
だけのことであったらしい。

家司として兼実家へ奉公をしてきた行頼が他界した。奉公は二十五
年になると云う。讃岐には思いがけない行頼の死である。かつて皇嘉
門院女房に出仕した時から世話になった同族の長老であり、讃岐には

一際感慨深いものがあつたと云えよう。

讃岐が父の満中陰を七月十三日に済ませ、禊を修して兼実家へ戻つたのは凡そ十七日頃であろう。讃岐が早々に兼実家へ戻つたのは、兼実の意向を汲んでのことであろうと考えられる。

姫君は八歳になり着袴儀を迎えるまでに成長した。姫君の着袴儀が十九日に行われたのは、讃岐が兼実の許へ戻る日を考慮して設定されたものと考えられる。この日の記述には「母上」「女房」「陪膳女房」と書き分けられており、「女房」表記は讃岐である。

七月廿五日 此日、姫君着袴之後、始参女院御方、非行始之儀、

只密々之事也、

八月十六日 女房参女院御方、

記述は無いが着袴儀を済ませた姫君に讃岐が付き添って、七月廿五日に女院の御方へ挨拶に出かけている。また、八月十六日には讃岐が女院の御所へ恒例のご機嫌伺いに出向いている。

九月三日 定長持来醫方抄一帖、为一見所尋召也、此次

問所劳事、申云、脚氣之上氣之所致歟、委思慮可令申云々、

九月七日 早且女院渡御御堂、为訪余所悩給也、余依歩

行不通、不能出仕、佞所渡御也、女院還御之後、余帰宅、定長来、余疾疑逆氣之病、持来病患論、其説余病作、

兼実の所労は九月に入るとかなり悪化しており、医師に持参させた書物を見て自分の症状を問ひ質している。女院は九月七日に兼実を御堂に於いてお見舞いになった。

九月八日 凡今般之疾勝_レ於先々、内心極弱非_レ無_レ其恐、入_レ夜

始所作、股膝不_レ叶_レ心、行歩如_レ不通、左右手健冷、又快難_レ動、

九月十日 今_レ所_レ修六萬遍許敷、

九月十五日 又心神散乱、遺恨多端敷、又毎夜転_レ誂法華經一卷、

今晚女房夢、

九月十九日 ・・召_レ頼基、示_レ療治事、廿一日可_レ加_レ灸治之

由令_レ申、

その後、八日には体温の極端な低下により歩行困難、手足の冷え、股膝や手が不自由になっている。兼実自身も病気の回復を願ひ念佛を唱え、毎夜法華經一卷を転讀し、灸治の手配まで気を配っている。兼実に付添い、時には吉夢を見て、介護に明け暮れている讚岐である。頼朝の決起が関東から伝えられ、洛中は戦いに対する恐れが立ち込めている。朝廷は治承四年九月五日付で頼朝追討の宣旨を出し、官軍の平家に追討を命じている。比叡山の大家が蜂起する中、右少将維盛朝臣を追討使とする一行が、九月廿九日に伊豆国へ向けて出発した。

十月三日 女院御方被_レ始_レ行御儀法、関東事已及_レ大事、

十月廿四日 女房参_レ女院御方、此日御儀法結願也、

女院御方では十月三日から御儀法が始まり、兼実は参入出来るまでに回復したらしく、三日、十日、十一日と聴聞に参入している。讚岐も廿四日の御儀法結願には参入している。

比叡山大衆の激しい反抗^②。朝廷の追討使は追返され、坂東逆賊の頼朝軍の底力を見せつけられた。遠江以東十五カ国が十一月八日に頼朝に靡き、十二日には美濃源氏が与力し、廿一日には近江國も頼朝軍に靡く。そして一院の第三親王の宣と称する「清盛法師を誅伐すべき」という怪文書が関東より届く。近江國の武士等は廿九日に三井寺に少々打ち入っており、朝廷は近江道、伊賀道、伊勢道へ追討使を下向させた。

十一月五日、宗盛は京へ遷都を進言したが清盛は福原に固執した。しかし、漸く遷都を承知したので法皇は廿三日に御出門、廿六日未刻許に御入洛であった。

平家方は南都の大衆を追討するために、十二月廿五日に重衡を下向させる。重衡は興福寺と東大寺など御堂や房舎は云うに及ばず、狛川原の邊にある在家も併せて焼払い、悉く南都を灰燼に帰して帰洛した。『平家物語』で語られる重衡の南都焼討である。

十一月十八日 今晚有_レ最上之吉夢、今夜余夢_レ天下動靜事、吉凶未_レ決、東亂及_レ近江國云々、

十一月廿五日 女房及姫君、参_レ詣賀茂社、・・無_レ出車、且依_レ夢想_レ所_レ参也、今晚又為_レ余有_レ最吉夢

十二月五日 今日余女房讚岐、令參春日了、去月八日欲參、

而聊依有夢想事、今日所令參也、又心經十二

卷、今日於御社奉供養、同每年事也、

政情不安の都の中で神仏の加護を信じて救いを求める兼実である。

夢想による吉慶を信じて、十一月廿五日には嫡妻と姫君を賀茂社へ参詣に行かせ、十二月五日には余女房讚岐を自分の夢想により代理で春日参詣に行かせている。

十二月廿日 今夜夜半許、重家入道入滅、

十二月廿六日 参女院御方、依步行不叶、用手輿亥刻帰宅、

歌人・重家入道が十二月廿日に入滅した。讚岐も兼実家で接触があった。しかし、讚岐には和歌に打ち込む余裕がない。兼実の体調に合わせて介護に明け暮れる日々が続ぎ、父親の死と相俟って三十九歳の年は瞬く間に過ぎ去って行った。讚岐は滅私奉公の鑑と云うべきであろう。

兼実は歩行が困難で外出の折には手輿を用いている。兼実の体調は未だ回復していないので、傍にいる本妻讚岐に全幅の信頼を寄せて頼り切っている。兼実が夢想や吉夢を信じているのは、政治の場へ復帰したいという念願の現れと考えられる。

(8)養和元年(一一八一) 讚岐四十歳 兼実三十三歳

良通十五歳 姫君九歳 良經十三歳

一月四日 亥刻、参女院御方、相扶所勞、入夜所参入也、

一月十四日 寅刻人告云、新院已崩御者、事已一定、丑終寅始程

事云々、御葬今夜被用最略儀、後清閑寺陵、

(京都市東山区清閑寺歌ノ中山町)

二月七日 召定成、令見姫御前身、聊赤小瘡出之故也、非

疱瘡、依温氣、出来熱氣也、余自昨日風病、

咳氣競發、前後不覺者也、

二月九日 去夜、姫君温氣散了、快汗出了云々、余始小湯治、

依風病発動也、

二月十三日 早旦、女房密々参詣広隆寺、六角堂等、

二月十五日 季経朝臣来、談姫君入内之間事、万事不具云々、

二月十九日 巳刻、参女院御堂、(日来御坐御堂) 今日殿御忌日

也、

閏二月廿四日 ……女房参女院御方、

兼実家へ入って八年目の讚岐である。兼実は体調不良ながら女院への新年の挨拶には出向いている。新院は一月九日に御惱、十二日に御悩危急、十四日には崩御になった。

姫君の気分が勝れない。兼実は二月七日に医師を呼び、手当をしたので姫君は九日には回復した。十三日には讚岐が広隆寺と六角堂へ参詣して、姫君の病氣平癒のお礼と姫君の将来を祈請したのである。

兼実は姫君の入内を法皇側近へ働き掛けており、所勞を押しつけて女院へ参仕するのは、女院の口添えを期待しているものと考えられる。なお、閏二月廿四日には讚岐が女院の御所へ恒例の挨拶に出向いている。

二月一日 伝聞、謀反賊源義俊、(為義子、号十郎藏人云々)率_レ数万之軍兵、暫休息近江、美濃之邊、

二月廿七日 伝聞、禪門病_レ頭風云々、

二月廿八日 禪門頭風、事外有_レ増云々、又中宮不例云々、

二月廿九日 ・・・今日、以_レ基輔朝臣、遣_レ禪門并邦綱卿等之許、

訪_レ疾、

閏二月五日 禪門薨逝、一定也、及び基輔朝臣、弔_レ喪家、

閏二月六日 於_レ院殿上、被_レ僉議関東乱逆之事、

閏二月十五日 追討使藏人頭正四位下平重衡朝臣、相_レ具院庁御下

文、所_レ発向也、

三月十七日 ・・・秀平(秀衡)為_レ責頼朝、軍兵式萬餘騎、出_レ

白河関外、

五月一日 伝聞、頼朝已欲_レ上洛云々、

七月十三日 衆火競起、炎旱、飢饉、関東以下諸国謀反、天変、

怪異等也、

七月廿四日 北陸諸国与_レ力東国了、

東国では謀反が起きている。折から清盛は頭風を病んでおり、二月廿八日には頭痛が酷くなった。廿九日に兼実も清盛の病氣見舞いをしたが、閏二月五日に清盛は薨去した。『平家物語』には高熱の清盛が描かれているが、真相は極度の頭痛であつたらしい。

朝廷は閏二月六日に関東の亂逆について僉議し、十五日には重衡を美濃国追討使として下向させた。奥州には頼朝を攻める秀衡がいる。

五月に入ると頼朝が上洛を覗う。七月十三日には火災、早魃、飢饉、

関東以下諸国の謀反など、天変恠異に戸惑う朝廷である。廿四日には北陸諸国が東国に与力している。

九月十日 通盛朝臣之軍兵、為_レ加賀国人等、被_レ追降事一定云々、

九月十九日 伝聞、君臣引率、可_レ赴_レ海西之由、已被_レ一定了、

九月廿日 伝聞、東国、北陸、共以強大、官軍尪弱云々、

十月廿七日 ・・・或人云、頼朝必定已企_レ上洛、

十一月廿五日 中宮職院号定也、奉_レ号建礼門院云々、

九月十日には追討使が加賀國で追落とされ、平家方は十九日に法皇と公卿達を引き連れて西海に赴くことを決定した。東国や北陸は強大だと朝廷はやつと気付いたらしい。十月には頼朝が上洛を企てており、十一月廿五日には中宮に建禮門院の院号を奉ることになった。

三月四日 亥刻、女院御所炎上、先渡_レ御々堂御所、(大将并其

室同之)其後、余婦_レ家、令_レ禦_レ餘焰、遂免了、

女院渡_レ御余家、及_レ深更、余渡_レ居南尼上家、(先

是、女房等渡了)

三月十四日 女房姫君、密々参_レ詣広隆寺、六角堂等、

三月廿一日 丑刻、女院御所焼亡、余不_レ参會、出_レ自_レ御所之内

云々、余居所希有免了、凡_レ廿日之内、両度有_レ此

災、非_レ言語之所_レ及、女院御生中、令_レ遭_レ火給事、

加_二今度_一七ケ度也、毎度出自_二御所内_一云々、

三月廿二日 女院御堂御所四壁不_レ全、仮竊渡_二御頼輔入道南直廬_一、

未曾有事也、留_二御堂御所_一、殿上、為_二表御座_一候
之由也、

三月廿四日 女房参_二院御所_一、中御門大納言被_レ来、為_レ訪也、日

来依_二所勞_一不_レ罷行_一云々、

三月廿七日 尾張相国入道、入洛之慶、内々示遣、以_二女房_一、伝_二

憲親法師_一也、

四月廿七日 甚雨、女房参_二女院御所_一、

女院は生涯のうち七度の火災に見舞われている。三月四日、亥刻に女院御所から出火、全焼は免れた。女院は同居の良通と其室を伴って御堂御所に避難されたが、その後、兼実家に渡御されたので、兼実は嫡妻と姫君を伴い嫡妻の母親尼君の許へ渡居させた。

渡居後の三月十四日に姫君と讃岐は広隆寺と六角堂へ参詣している。ところが三月廿一日の深夜に女院御所が全焼した。女院の避難先の御堂御所は四方の壁面の補強工事が必要なので、竊に頼輔入道の南家に渡御された。未曾有の事なので廿四日に兼実の使いとして、讃岐が院の御所へ出かけて、現状説明をしたものと考えられる。三月廿七日には尾張相国入道の入洛の慶びを伝える為に、讃岐は兼実の使者の役目も務めており、四月廿七日には女院へ恒例の挨拶に向いている讃岐である。

讃岐は病弱な兼実を支え、兼実も本妻の讃岐に頼り切っている。兼実が居所を多数持てば雇用する女房の人数も多くなる。当然、本妻の

讃岐が女房の雇用管理をしなければならぬ。兼実家の主要な人物として、讃岐はその地位を確立していったことが理解できる。

六月三日 女房姫君(九歳)、物_三詣吉田、祇園_一也、密々事也、

六月五日 亥刻、女院渡_二御楊梅壬生之邊家_一、余大將同車参会、

及_二深更_一帰宅、

六月七日 未刻、参_二女院御所_一、(壬生殿也)入_レ夜帰_二九条_一、

六月十七日 参_二女院御所_一宿仕、

七月四日 申刻参院、依_レ召参_二御前_一、数刻預_二勅語_一、而天氣甚

快、参_二女院_一宿候、

七月十一日 早旦参_二女院_一、依_レ召也、

兼実の所労は五月中頃にかなり回復した。女院へ毎日のように祇候し、自分に対する吉夢に喜び、病氣回復の為には韭を服し念仏にも余念がない。六月三日には讃岐が姫君と共に吉田、祇園へ参詣に出かけている。四日には兼実が覚智僧正六条壬生家を下見して、御堂御所の補強工事が終わるまでの假御所にする手筈を整えている。

七月四日には法皇からお召しがあり、長時間に亘り兼実へ直々にお言葉を賜わった。兼実としては有難く嬉しく、法皇のご機嫌が頗るよいので胸を撫で下ろしたのであろう。

七月十四日 此日、有_二改元事_一、(養和、敦周擇申云々)安徳天皇、

七月廿五日 小兒(女子)於_二女院御所_一、密々有_二食_一魚味_一事、(母

大貳八条院女房三位局)

七月廿六日 女房参_ニ女院御所、密々用_ニ侍従車、共侍両三人、基

輔朝臣連_レ車、

八月四日 女房姫君、密々参_ニ詣賀茂社、最密々儀也、

八月九日 戌刻、女院自_ニ壬生御所、還_ニ御九条頼輔入道直廬、

八月十日 女院御所棟上也、申刻、法性寺座主被_レ来、数刻談

語、

八月十八日 親經来、余对_ニ面之、

七月十四日に改元が行われて養和元年となった。廿五日に兼実落胤
女兒の「魚味を食する儀」が女院御所で行われた。翌日、讚岐は女院
御所へお礼の挨拶に出向いている。八月四日には姫君のお供をして賀
茂社に参詣している。

女院は九日に壬生御所から九条頼輔入道直廬へ還御になり、翌日の
十日に女院御所の棟上げが行われた。十八日には法皇側近の親經が兼
実家を来訪している。

十月十三日 女房参_ニ女院御方、

十一月二日 女院新御所御渡也、非_下菅不上用_ニ移徙之禮、還幸

之儀省略、亥終有_ニ渡御、依_ニ程近、人々歩行也、
女房狩衣、濃袴也、

十一月三日 女院還御、依_ニ半作_ニ可_ニ念造畢_ニ之故、一宿之後、

即還御也、

十一月九日 参_ニ女院御方、御_ニ覽新御所、候_ニ御共、

十一月十四日 午刻、頼業来、呼_レ前談_ニ雜事、申刻、相_ニ具女房、

参_ニ新御所、見廻、

十一月十九日 戌終許、更着_ニ烏帽直衣、参_ニ御所、即御幸、余及

大将、寄_ニ御車、

兼実は何度となく女院御所の工事現場を見回っており、その努力は
大変なものである。十月十三日に讚岐が女院の御所へ恒例の挨拶に参
上している。

女院御所は未完成ながら十一月二日に女院の渡御が行われた。讚岐
は狩衣と濃袴で渡御に付き従っており、翌三日には還御になっている。
九日には女院自らが兼実をお供にして工事現場に出向かれています。讚
岐は十四日に兼実に伴われて工事現場を視察し、女院御所の装束を下
見したと考えられる。十九日には新御所が完成して女院の御幸が行わ
れた。

十一月廿九日 入_レ夜女院聊御風氣御云々、伋馳参、殊六借御、

女房等語云、酉刻許頗令_レ振給、其後、別事不_レ
御而之間、只今乍_レ居令_ニ転倒、其後不_レ覺御
云々、

十一月卅日 女房告送、今朝猶不_ニ快御云々、即辰時馳参、御

食事不_レ通、御心地雖_レ無_ニ殊事、自_ニ今夕_ニ被_レ始_ニ
御懺法、今夜宿候、

十二月一日 聊有_ニ御減、然而不_ニ退出、今夜猶宿候、入_レ夜、

有_ニ御増、及_ニ危急、

十二月三日 今日殊有_ニ御減、今夜猶宿候、御受戒如_ニ昨日、殊

令_レ念佛_二給、

十二月四日 申刻、頗令_二病悩_一給、大略御終焉之刻歟、御眼精

頗令_レ交_レ給、寅刻遂以崩御、

十二月五日 御衣改、初日仏事、入棺、御墓所渡御、御葬礼等、

(御墓所・最勝金剛院御所)

十二月十八日 饑法、例講、第二七日也、入_レ夜資長来、於_二御堂_一

謁_レ之、

女院が風邪気味だとの報せが十一月廿九日にあり、兼実は馳せ参じた。女院は震えと意識が朦朧とした状態で転倒し、翌朝も不快に御すというので、このような状況の中でも卅日の御饑法は予定通り始められるという。連続して宿候する兼実を讃岐が気使っているのは当然であらう。

十二月四日寅刻、皇嘉門院は崩御になった。御墓所は東福寺境内の最勝金剛院御所である。兼実は所労を忘れて参仕しており、年明けへと供養は続く。

- (1) 九月七日 大将 (十四歳) 侍従 (十二歳) 密々有_二連句_一、七十韵
- (2) 九月廿五日 文士一両会合、大将、侍従等、有_二連句之興_一、先仙五十韵、
- (3) 十月一日 密々、大将、侍従有_二連句興_一、範季候_レ座、
- (4) 十月三日 有_二小連句_一、
- (5) 十月六日 大将、侍従有_二連句之会_一、文士四五許輩会合、又密々有_レ詩、

(6) 十月十日 両息、連句会、密々事也、

(7) 十月十四日 大将、侍従等、有_二連句会_一、及_レ晚、見_二廻作所_一、又参_二女院_一、

(8) 十月十五日 両息有_二連句会_一、長光入道、光盛、文士七八輩、

大将侍従同数也 (共十四韻、陽唐百廿韻)

(9) 十月十七日 侍従方、庚申之次、有_二連句和歌等事_一、

(10) 十月廿三日 大将、侍従等、有_二連句会_一、文士六七許輩、其後有_レ詩、

(11) 十一月六日 大将、侍従有_二連句会_一、(真臻百韻) 又密々講_レ詩、

題云、白雲飛_二詩席_一、

(12) 十一月十日 両息有_二連句会_一、(先仙百韻) 又密々有_レ詩、寒月映_二簾帷_一、

(13) 十一月廿二日 大将、侍従有_二連句会_一、(虞模百韻) 長光入道在_レ

座、光盛、光長以下、文士十餘輩、頗有_二其興_一、又有_レ詩、醉中不_レ識_レ冬、(濕字)

養和元年の連句会が讃岐と関わる状況を見ておきたい。右記の通り兼実家では良通と良經が成長し、密々連句会が十三回行われている。

ここでは若年の良通と良經が非凡な才能を覗かせている。同席の文士たちも和歌以外の才能を秘めており、これも時代の趨勢であらうか。

兼実家で連句会が行われると接待役は讃岐である。従って讃岐も同席して知識を取得することは、十分に可能なことである。文士達が同席すれば讃岐の同席も考えられるので、ここで取得した知識が『二条院讃岐集』や、後年の勅撰和歌集に活かされていると考えられる。ま

た、後に歌壇の指導者となる若い良經との繋がりも指摘できる。

(9) 壽永元年(一一八二) 讚岐四十一歳 兼実三十四歳

良通十六歳 姫君十歳 良經十四歳

一月十二日 舊臣女房等、奉_レ供_ニ養結縁經_一、此中余女房、自筆書_ニ

写般若心經_一、為_レ答_ニ芳恩_一也、普賢菩薩、并十羅

刹女、(二舖半)女房等手自所奉_レ也、今日女房

参入聴聞、

一月十七日 大将修_ニ仏事_一、女房為_ニ聴聞_一参_ニ御堂_一、

一月十八日 朝懺法之次、女房供_ニ養仏經_一、此日御法事也、

一月廿四日 御正日也、余参_ニ御墓所_一(大将同_レ之)見_ニ廻御堂_一、了

後帰_ニ南家_一、

今夜、女房等留_ニ候御堂_一也、日来之間、不断念佛、

御周閑、不_レ可_ニ退転_一之由、召仰了、女房侍僧等、

可_ニ結番_一之由仰了、

兼実家へ入つて九年目の讚岐である。前年末から継続して女院への

供養と法要が続いている。一月十二日には女院に仕えた人達で結縁經の供養があり、讚岐は自筆書写の般若心經を供養している。法要を聴聞し女院の冥福を祈る讚岐は女院との出会いを、また二条院皇后育子との縁にも想いを馳せていたことであろう。

十七日は良通の宮む佛事に讚岐が聴聞に参入しており、十八日には讚岐が仏經を供養している。御正日には御堂に留まり結番して、不断に念佛をするようにと、女房侍僧等に兼実が命じている。

二月三日 大将風病、仍為_レ訪行向、頗有_ニ辛苦之氣_一、修_ニ仁王

講_一、及_レ晚、女房為_レ訪行向、

二月十五日 酉刻参_ニ御堂_一、大将自_ニ今夕_一渡_ニ邪氣_一、定成、問_ニ所

勞事_一、

二月十八日 午刻、参_ニ御堂_一、女房三位局、有_ニ佛經供養事_一、大将

又扶_レ病参入聴聞、

二月廿日 入_レ夜大将不例之由告来、即行向、智詮祈_レ之、亥刻

落居了、

良通が風病を患つたので兼実が二月三日に見舞つており、晩には讚岐も見舞つている。女院の供養と法要が長期に継続しており、良通に疲れが出ている。十八日の女房三位局の供養に、良通は無理をして参入したが、廿日には寝込んだので、お抱え僧に祈禱をさせている。

二月廿二日 自_ニ未刻許_一、風病更發、浴湯之後、弥増_ニ温氣_一加_レ火、

東西不_レ覺、服_ニ訶梨勒丸_一、瀉之後、入_レ夜少減、

温氣少散、

二月廿三日 風病頗宜、食事不_レ如_レ例、無力無_レ術、

二月廿四日 所勞今日増_レ自_ニ昨日_一、余有_ニ今来月可_レ慎_レ命之夢想_一、

二月廿六日 佛嚴聖人来問_レ疾、余乍_レ臥対面、最勝金剛院修二月

云々、

三月四日 大将加_ニ灸治_一、中御門大納言被_レ来、余湯治之間、不_レ

謁_レ之、

三月五日 故院御月忌也、余依_ニ湯治_一、不_レ参、大将来_ニ余第_一加_ニ

灸治、

三月六日 大将来加灸治如昨、此日、除目始也、懸命に女院の供養を行ってきた兼実も、二月廿二日から体調不良になり臥せっている。そこへ三月に入ると良通が灸治のために参入してくる。讃岐を始め女房達が兼実と良通の介護に当たっていたが、二人の病人の世話は大変である。

三月十五日 沐浴、入夜参宿御堂御所、自今日初夜時、可始

如法懺法前、方便之懺法之故也、

三月廿日 入夜、初夜懺法如常、

三月廿二日 今日懺法、後夜日中許行レ之、重厳浄道場、余洗

頭、衣裳已下、食膳器等、皆新調也、

三月廿三日 此日、後夜時始修、三七日一心精進、法花三昧、

三月廿六日 懺法読経如昨、可書写如法經之由、自今日思

立、

三月卅日 女房為聽聞來御堂、今日三時懺法如常、

四月五日 御月忌也、大将相扶灸治参入、

四月十四日 自今晝、奉書始如法經、懺法之後有啓白、

四月十五日 昨日、法皇御登山之間、山僧等可奉盜取法皇之

由、今旦、得其告、洛中武士騒動、忽率数多騎

向坂下、依僻事空帰了、嗚呼第一事云々、

四月十六日 如法経終写功、奉埋最勝金剛院山、(故女院御墓所

近辺也)

四月十九日 伝聞、十五日浮言、全玄僧正告前大将之由風聞、

兼実は体調不良ながら供養と法要に専念する。しかし、それには讃岐の援助が必要になる。三月廿二日では道場を清浄に保つために衣裳、食器に至るまで新調するという。道場で参宿する兼実の食事の世話や睡眠の世話もある。讃岐の配慮は多大な労力を要するものと云えよう。御懺法は三月卅日に讃岐も聴聞しており、この頃には兼実の体調も少し回復して来たらしい。

ところが世間では、四月十五日に法皇が比叡登山の間に、山僧達が法皇を盗み取ると密告する者があった。しかし、十九日に虚言だと判ったので大騒動は収まった。

・四月廿三日 大将来此第、密々有詩、連句等、

・四月廿八日 大将来、此夜、密々有詩、連句等、長光入道候其

座、

五月五日 御月忌也、佞参御堂、二位中将、僧都等参侯、大

将又参、

五月十六日 余始出仕、椽直衣、練指貫、白帷、重服冠、黒沓等

也、参院許也、入見参、

五月十八日 被始恒例供花云々、

五月廿五日 佛眼行法結願也、

五月廿七日 此日、改元也、被用壽永、(後経卿扱申云々)後鳥

羽天皇、

六月四日 奉始一尺三寸十一面像、智詮阿闍梨加持御衣木、

六月五日 依_レ御月忌、参_レ御堂、二位中将、僧都等参候如_レ例、

大将又参、

・六月十三日 大将方有_レ連句、並密々詩云々、

六月十六日 入_レ夜、奉_レ供_レ養一尺三寸十一面観音像、并同經一

卷、千手陀羅尼一千反、

六月廿一日 参_レ御堂御所、及_レ晚帰来、

・六月廿九日 女房等参_レ御堂、終日供_レ養於法華經、女房所参、

余同参入、及_レ晚帰来、

今夜、大将、少将共有_レ連句之興、又密々有_レ詩

云々、

五月廿七日に改元が行われて壽永と改められた。賀茂重保の百首撰歌集の勸進があった頃、兼実も良通も体調が少しは回復したらしい。

心を込めた女院への供養と共に、良通と良經の詩と連句会もまた復活している。資料の行頭に・を付して見ると、四月から十二月の間に八回行われている。五月十六日に兼実は院へようやく出仕し、六月十六日には十一面観音像や観音經の供養を行っている。六月廿九日には女房たちが供養する法華經供養に、讃岐と共に兼実も参入している。

七月廿日 及_レ晚大将除服之後始出仕、先参院、参_レ建禮門院、

次参内、

七月廿四日 巳刻、大将不例、大略瘧病歟、

七月廿六日 大将大事發了、假申刻許行向、雖_レ重病不_レ及恐、

女房同来、入_レ夜帰宅、

七月卅日 大将今日平癒了、

賀茂社の神主、加茂重保（一一九〇—一一九二）の勸進により、七月中旬頃に『二条院讃岐集』を賀茂社に奉納している。七月八日に讃岐が供花をしているのは、女院の霊前と亡き父頼政に歌集奉納の成功を祈念していると考えたい。後年、『千載和歌集』にはこの歌集から三首撰入されて、讃岐が女流歌人の地位を確立した歌集である。

七月廿四日から良通が寝込んでおり、廿六日には兼実と共に讃岐も見舞いに訪れている。卅日に良通はようやく回復したが、度重なる良通の体調不良は気懸りである。

八月一日 入_レ夜、余病惱如_レ例、風病歟、温氣如火、終夜惱

乱、

八月四日 今日神心不快、

八月五日 故院御月忌也、瘧病之發日、当_レ物忌、而抛_レ万事、

参_レ御堂、今日所勞体、聊以宜歟、女房参入、大

七月十四日 奉_レ為故女院、奉_レ供_レ養畫像积迦如来像一鋪、并反

古色紙妙法蓮華經一部、

・七月十八日 大将来、有_レ小連句、並詩等事、

八月八日 召_レ定成_レ加_レ灸治、(十二箇所)然而依_レ本病無_レ術、

強_レ灸也、

八月十四日 此日小兒女、密々有_二百日事、依_二余障、於_二大将第_一

有_二此事、

・八月十五日 今夜為_レ違_二秋相方、宿_二大将南宅、先_二是有_レ詩、題

云、勝地翫_二明月、

・八月廿七日 入_レ夜為_二方違、參_二御堂、大将少将有_二当座詩、文士

少々会合、不_レ及_レ夜、

兼実は八月一日から寝込んでいたが、五日の高倉院御月忌に参入すると云う。讃岐も良通に伴われて参入している。八日には本病治療のために兼実は灸治を始める。

兼実の落胤女兒(母女房三位殿)の百日儀が、十四日に良通家で執り行われている。兼実の障りとは病ではなく、自分の居所で行うには都合が悪い。百日儀への讃岐の参入は当然である。十五日には良通南宅で詩会があり、廿七日には方違先の御堂で当座詩が行われている。

八月廿九日 入_レ夜中御門大納言被_レ来、大将習_二始催馬楽、(伊勢

海、先三句)

九月三日 中御門大納言被_レ来、大将習_二伊勢海残三句了、

九月十三日 中御門大納言被_レ来、教_二催馬楽於大将、

十月三日 未刻定能卿来、自_レ院告送云、大将殿御事、一定沙

汰候歟、

右大将良通任_二権大納言、

十月四日 依_二大将慶_一人少々来、入_レ夜参院、為_レ恐_二悦申大納

言慶事_一也、

十月七日 入_レ夜中御門大納言被_レ来、大将習_二催馬楽、大将還

宣旨、

十月十四日 今且女房見_二最吉夢、

十月十八日 右大将任大納言拜賀也、以_二家司季長朝臣先申_レ余、

十月廿一日 大嘗会御禊行幸也、余相_二具女房、大将女房、最

密々見物、

兼実は良通に公卿の嗜みとして催馬楽を習わせている。兼実は良通の大納言所望を諦めずに只管所望の祈りを修し続けた。吉報が十月三日に齎されると、四日には人々の祝賀があり、夜に入ると兼実は大納言拜受のお礼に院へ出向いている。

十四日には讃岐に最吉夢があり、十八日には良通の大納言拜賀が行われた。廿一日の大嘗会御禊行幸を、讃岐と良通室家が兼実に伴われて見物している。

十一月七日 右大将任_二大納言着陣也、

十一月十八日 故女院周關御法事也、修_二曼陀羅供、奉_レ供_二養御

墓所小堂、伴_二大将、參_二御墓所、山法印僧都、

二位中将等参上、其後、女房為_二聴聞参入、于_レ

時日没之程也、事了、人々退出之後、法印、二

位中将等退去、次女房帰宅之後、余相_二具大将_一

退出了、

十一月廿八日 寅刻饑法了、大将已下旧臣之男女陪從等廿餘人、

書之、

兼実は体調が回復したようである。十一月七日は大納言良通の着陣であり、高地位を望むことは兼実家であればこそ出来ることである。十八日に御墓所最勝金剛院の小堂で行われた女院の法事に、讃岐も聴聞に訪れている。廿八日には懺法が修了し、旧臣の男女陪従等廿餘人が懺法を書いている。讃岐もその中の一人である。

十二月七日 秋除目也、少将任_ニ中將_一、

十二月十日 日中時結_ニ願供養法_一、今暁女房見_ニ吉夢_一、折節尤可_レ

悦、

十二月十八日 大将教_ニ節会内辦事_一、有_ニ習禮_一、

十二月廿日 中將拝賀也、兼日告_ニ兵部省_一、并仰_ニ本府_一、又触_ニ

所々_一、

・十二月廿一日 大将方有_ニ密々詩講_一、余行向、入_レ夜帰来、女房参

入、大将相_ニ具之_一、

十二月廿六日 定能来、大将密々有_ニ会之習禮_一、

良經も十二月七日に秋の除目で中將に任じられた。十日には讃岐が吉夢を見ている。十八日には良通の習禮があり、廿日に良經の拝賀が行うために兼実は手筈を整えている。廿一日には詩講が行われて兼実と讃岐が共に参入しており、良通が讃岐を伴っている。この状況から讃岐は詩と連句会に何度も参入していたと考えられる。廿六日にも良通の習禮が行われている。

年表『二条院讃岐の実人生』(二)

(7) 治承四年(一一八〇) 三十九歳 七年目。

兼実の体調不良は断続的に続いており、讃岐は傍を離れることが出来ない。

九月には体調不良が悪化しており、兼実に対して女院のお見舞いがあった。

兼実は年末には歩行困難になり、外出には手輿を用いている。

一月八日 姫君のお供で吉田、崇神院等へ参詣。

一月十一日 姫君と共に新年の挨拶に女院へ出向く。

二月廿四日 兼実の介護の合間を縫って、女院の御堂へ修二月の聴聞に参入。

三月九日 姫君と他の女房も共に、稻荷・祇園社等へ参詣。

三月廿三日 今暁に吉夢あり。兼実は俄に熊野へ使いを立てる。

三月晦日 兼実の吉夢に依り、墨字で心經三巻を書き、供養奉る。

五月廿六日 宇治橋の合戦で父頼政と兄仲綱、そして源氏一族を失う。

七月十三日 父と兄の中陰明け。

七月十七日 禊を修して急ぎ兼実家へ戻って来た推定の日。

七月十九日 姫君の着袴儀に参仕。

七月廿五日 着袴之後、始めて女院御方へ出向く姫君に付添う。

八月十六日 女院へ恒例の挨拶に出向く。

九月十五日 暁方に夢あり。兼実の所労回復を願う強い気持ち。

十月廿四日 女院御方の御懺法結願に参入。

十二月五日 兼実の代理で心經十二巻を携えて春日参詣。

(8) 養和元年 (一一八一) 四十歳 八年目。

兼実は年頭より体調不良が続く。五月中頃にはかなり回復する。

八月・女院御所の棟上げ。十一月・渡御。十二月四

日・女院崩御。

その後の追善供養と法要には、兼実は病を忘れて参仕する。讃岐の悲しみ。

二月十三日 早旦から単独で広隆寺、六角堂へ参詣。

閏二月廿四日 女院への恒例の挨拶に出向く。

三月十四日 姫君と共に広隆寺、六角堂へ参詣。

三月廿四日 女院御所の火災により、頼輔南直廬へ一時渡御の経緯を院に申上。

兼実の代理で讃岐が院の御所に出向き、兼実の意向を伝える。

三月廿七日 兼実の代理で、入道入洛の慶を憲親法師に伝える。

四月廿七日 甚雨の中。女院御所へ恒例の挨拶に出向く。

六月三日 姫君と共に恒例の吉田、祇園へ参詣。

七月廿五日 兼実の落胤女兒の魚味を食する儀が女院で行われた。

七月廿六日 女院の御所へ参る。昨日の行事のお礼に出向く。

八月四日 姫君とともに賀茂社へ恒例の参詣。

九月七日から十一月廿二日の間に、兼実家では連句会を十三回開く。

文士達が同席するときには讃岐の参入もあり得る。詠歌に関して早くから良通や良經との繋がりが指摘出来る。

十月十三日 女院への恒例の挨拶に出向く。女院の御所は再建中。

十一月二日 女院の渡御儀に、狩衣と濃袴で供奉する。

未完成の女院御所への渡御儀は、近辺により徒歩にて行われた。

十一月十四日 兼実と共に女院の新御所を見回る。装束の下見と考えられる。

十一月十九日 女院新御所渡御。その後、廿九日御不餘始。六日

後に崩御。

十二月四日 皇嘉門院崩御。御墓所・最勝金剛院御所。

(9) 寿永元年 (一一八二) 四十一歳 九年目。

兼実は二月から四月頃にかけて所労が続く。良通の体調不良も重なる。

所労の兼実は御堂に参宿し一心に法要に努める。兼実へ讃岐の気配りが続く。

兼実家は良通と良經の位階昇進で慶賀が続く。

一月十二日 女院の旧臣女房達が結縁經を供養。讃岐も聴聞

に参入。

讚岐は自筆の書写による般若心經を供養。

良通の営む佛事に聴聞のため参入。

一月十七日

兼実は女房侍僧等に御堂に留まり、結番して不

一月廿四日

断に念仏すべしと指示。

二月三日

良通の風病を見舞う。

三月卅日

三時懺法を聴聞のため参入。

五月十六日

所労軽減に依り兼実が出仕する。傍らに居る讚岐も安堵する。

六月廿九日

女房達の法華経供養に讚岐も兼実と共に参入し聴聞。

七月八日

御堂に参り供花。女院と亡き父頼政にも歌集奉納の成功を祈念。

七月廿六日

加茂重保の勧進により七月中旬頃『二条院讚岐集』を賀茂社に奉納。

八月五日

良通の体調不良を兼実と共に見舞う。

八月十四日

良通に伴われて御堂の高倉院御月忌へ参入。体調不良の兼実も参入。

十月十四日

最吉夢を見る。

十月廿一日

兼実に伴われて良通室と共に大賞会御禊行幸を見物。

十一月十八日

女院年回忌。最勝金剛院小堂で行われる佛事に参入。

十二月廿一日

良通に伴われて復活連句会に参入。詩と連句の知識を得る。

四月廿三日～十二月廿一日間に復活連句会を八

回開講。(注4参照)

おわりに

讚岐は体調不良の兼実の傍らにあつて介護に明け暮れていたが、その一方で次世代の良通と良經は頼もしい若者に成長していった。兼実は詩と連句に対する二人の才能を更に伸ばすために、時には文士を招き入れて密々ながら詩と連句会を催している。

この詩と連句会には、兼実の参入と良通に伴われた讚岐の参入も見えており、讚岐にとつては和歌以外の知識を豊富に得る場であつたと云えよう。それは四十一歳・寿永元年七月に賀茂社へ奉納した『二条院讚岐集』や、これ以後の勅撰和歌集等に反映されていると考えられる。

本稿での検証に依り、兼実の意識は讚岐に依存していることが見えている。兼実は讚岐が傍らに居ない人生は考えられなく、自分に尽くしてくれる讚岐を、日常生活の中で重要な位置に置いて兼実は家経営に当っている。

それは時折自分の代理をさせていることである。春日への代理参詣、女院の火災時の処遇に対する院への代理説明、女院新御所の装束の取仕切り等から明らかである。頼政の満中陰を待つて姫君の着袴儀へ讚岐の参入を繰り合わせたのは、兼実ならではの配慮であろう。

養和元年十二月四日。二条内裏を退出して以来、讚岐の後見人であつた皇嘉門院の崩御である。讚岐が女院崩御の悲しみに浸るには、讚

岐の日々の生活環境は厳しいものであった。

本稿では養和元年七月廿五日、兼実落胤女子魚身を食する儀。寿永元年八月十四日、兼実落胤女子百日儀が見えており、この女子の成長を見守っていくことにしたい。

〔注〕

(1) 拙稿参考論文

「二条院讃岐の人生」―前半生を中心に―

『佛教大学大学院紀要』三十八号、平成二十二年三月

「二条院讃岐の実人生」―後半生を中心に―

『佛教大学大学院紀要』三十九号、平成二十三年三月

(2) 十月廿日

延暦寺衆徒、熾盛蜂起、又新都作事、竹柱之外一切不可候、

十月廿九日

坂東逆賊党類、餘勢及數萬、追討使疋弱無極云々、

十一月一日

追討使維盛朝臣已下、被追歸了、凡逆党不知幾萬騎、

十一月五日

前將軍宗盛、可遷都之由、示禪門云々、不承引之間、及口論、人以驚耳云々、

十一月廿六日

院入夜、御入洛、余依疾不參上、法皇、未刻許御入洛、

十一月八日

遠江以東十五カ国与力、至草木、莫不靡云々、

十一月十二日

関東逆党、已来及美乃国云々、

十一月十七日

美濃源氏等、皆悉与力凶賊等、両国併伐取了、

十一月廿一日

近江国又以属逆賊了、還都被縮畢、廿六日後入洛、

十一月廿二日

自関東称一院第三親王宣、可誅伐清盛法師、

十一月廿九日

近江国武士数千騎、自今日申刻許打入三井寺云々、

十二月二日

追討使下向、近江道方、知盛卿為大將軍、伊賀道、少將資盛為大將軍、伊勢道、即国司清綱行向云々、

(3)

十二月廿三日

維盛朝臣為副將軍、下向近江国云々、未刻、向新造之所、見作事、次參女院、

九月十八日

申刻參女院、此次見廻作所、

九月十九日

申刻、參女院、先見作所、入夜帰来、

九月廿六日

及晚、見廻造作之所、又參女院、入夜帰来、

十月二日

晚頭參新造所、即參女院、

十月五日

參新宮造之所、見廻、即參女院、入夜帰来、

十月九日

見廻作所、自其參女院、入夜帰来、

十月十二日

及晚、參新所、見廻、即參女院、入夜帰来、

十月十六日

晚景、參作所、參女院、即帰来、

十月廿日

參新御所并女院、入夜帰来、

十月廿二日

參新御所、

十月廿五日

見廻新御所、

十月廿七日

大将来此第、密々有詩、連句等、

(4) 十月廿三日

大将来、此夜、密々有詩、連句等、長光入道候其座、

(一) 四月廿八日

姫君猶發了、大將方有連句、並密々詩云々、

(二) 四月廿八日

今夜、大將、少將共有連句之興、又密々有詩云々、

(三) 六月十三日

大将来、有小連句、並詩等事、

(四) 六月廿九日

先是有詩、題云、勝地翫明月、

(いさ みちこ)

大將、少將有当座詩、文士少々会合、不及夜、

(五) 七月十八日

大將方有密々詩講、余行向、入夜帰来、女房參入、大將相具之、

(六) 八月十五日

大將、少將有当座詩、文士少々会合、不及夜、

(七) 八月廿七日

大將、少將有当座詩、文士少々会合、不及夜、

(八) 十二月廿一日

大將、少將有当座詩、文士少々会合、不及夜、

二〇二一年九月十二日受理

(指導・黒田 彰 教授)

文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学